

## 林野庁長官賞

### 「富士ひのき」の産地化および木材の情報発信基地づくり

『もくもくタウン・フジ』

消費者との交流で地域材需要を拡大

田子浦港木材共同組合

理事長 川口清俊

□事業体の構成

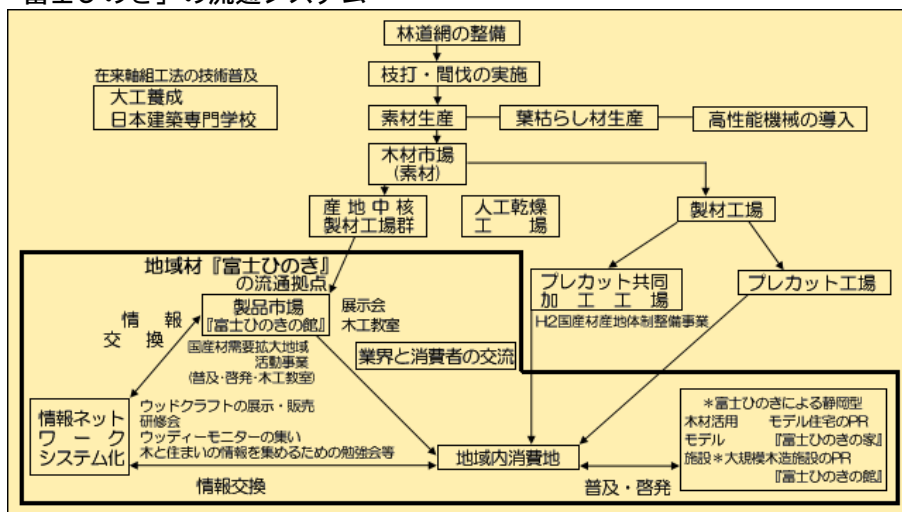
組合員30社＝製材業19社 流通業11社 内住宅部門を持つ8社

〒416 静岡県富士市蓼原889

TEL0545-61-2266



### □「富士ひのき」の流通システム



## 1 一斉拡大造林事業の展開

富士林業地域は、静岡県の東部に位置し、富士市、富士宮市及び芝川町の2市1町からなり、富士山の緩やかな西南麓を中心に広がった地域である。この地域の森林も戦争による増伐と戦後の復興のために乱伐、過伐により資源の枯渇と林地の荒廃もたらされた。県は、災害防止と将来の木材需要に対応すべく、県政の主要施策の一つとして造林事業を積極的に推進した。

富士山麓は、隣接する箱根山麓とともに昭和27年から昭和30年にかけて展開された、一斉拡大造林事業が有名であり、富士山麓林業開発事業では6,100ha、箱根山林業開発事業では6,900haとヒノキ主体の人工林が造成された。現在、富士地域の総面積6万haの60%が森林となっている。

(1) 高い人工林率：歴史の新しい林業地であるが、戦後の一斉拡大造林事業により、地域の民有林面積2万7,000haの79%、2万1,000haが人工林となっている。この人工林率は県平均の60%を大きく上回っている。(2) 豊かなヒノキ林：民有人工林のうち、74%を占める1万6,000haがヒノキ林である。また、新興林業

地にもかかわらず、人工林の70%が7齢級以上と高いのも、この林業地域の特徴である。

## 2 林業、木材産業の状況

地域には、森林組合が2組合、その他林業事業者が23あり、素材生産を実施している。平成2年の地域内での素材生産量は、国有林も含め2万3,000m<sup>3</sup>である。生産された素材は、地域と周辺地域で消費されている。また、木材協同組合が2組合、県森連の原木市場と田子浦港木協の製品市場が整備されている。

一方、製材工場は60工場あるが、林業の振興地のため、国産材専門工場は5工場と少なく、また、規模も小さい、いわゆる消費地型の工場である。このほか、国産材外材兼用が25工場、外材専門が30工場となっている。これらの工場への平成2年の素材入荷量は、国産材1万4,000m<sup>3</sup>に対し、外材が9万8,000m<sup>3</sup>と7倍に達している。外材比率88%は、県平均を13%も上回り、この地域の製材工場は、多くを外材に依存している。また、この地域は水に大変恵まれ、富士市には古くから製紙関連産業が発達してきた。国際貿易港、田子の浦港には、木材チップや外材が荷上げされている。

## 3 「富士ひのき」の産地化、銘柄化

新興林業地、富士地域の林業、木材産業の活性化のためには、地域材の安定供給と需要の拡大、消費者ニーズに対応した製品の開発などの流通システムの構築を図ることが緊要、かつ、不可欠である。(1)本事例が目指すもの：田子浦港木材協同組合は、今後、伐採可能量が著しく増大する地域材「富士ひのき」の域内での流通と消費拡大を組合再生の鍵とした。このため、市売市場の整備、富士ひのき銘柄材の展示や木工教室、ハウジングセミナーなどの開催、広報紙の発行、木造住宅の展示をとおして富士ひのきをはじめ、木材の良さを積極的に一般消費者、大工・工務店にPRするとともに消費者のニーズが林業経営にも活かされるよう川上にも情報を発信している。

「もくもくタウン・フジ」は、川上と川下が一体となった地域材の安定供給システムが未整備の新興林業地において、いち早く、流通システムの出口の部分を整備し、地域材の流通システムの構築を促すものである。

## 4 組合再生への道

(1)事業の縮小：田子浦港木材協同組合が経済成長期に県外において展開した木材センター、木材市場などの外部事業部門は、低成長期に入りマイナスに転じた。「退くも地獄、進むも地獄」の状況であった。その撤収は、昭和60年に終了したものの、まさに傷つき血だらけの撤収作戦だった。組合本体自らの見直し、経済事業の継続か廃止か、今後、如何にあるべきかについて討議を重ねに重ねた結果、敢えて継続のカードをとった。進む地獄の道だった。(2)思いもよらない再生への案：従来の殻から脱皮し、大胆な改革を断行して活性化を追求しなければ業界の将来は無いとの結論に達した。昭和62年度活路開拓ビジョン調査事業の指定を受け、将来像を求めて模索が続けられた。昭和63年度ビジョン検討委員会を設置して、当該調査事業の報告、検討、続いて政策委員会を設置し、ビジョンの具体案を発表した。これが「もくもくタウン・フジ」の前身像である(仮称)「ウッドィフォーラム・フジ」構想である。(3)組合員の反応：組合員の中には、この構想が余りにも現実ばなれした夢物語との反応が強く、協同組合組織での対応の難しさを味わった。(4)説得役になった役員：回を重ねる説得の結果。実施の方針が打ち出され、平成元年度から平成3年度にかけて施設の整備がなされた。建設が進み形が見えてくると、不安と希望が交叉する中で組合員の姿勢にも変化が出てきた。(5)組合30周年記念事業として完成：平成3年10月28日落成式、組合再生を掛けた事業は出発した。1年が過ぎて、来場者数は4,500人を数え、疑問を抱いていた関係者も一応の理解を示した。(6)富士地区林業振興対策協議会のバックアップ：「もくもくタウン・フジ」の実現には、地域の林業団体、木材団体、建築士会、営林署、县市町からなる本協議会のバックアップに負うところも大きかった。

## 5 もくもくタウン・フジ

富士ひのき製品の流通の拠点、木材・住宅などに関する情報の収集・発信基地として、「もくもくタウン・フジ」面積6,000m<sup>2</sup>は、次の3つにゾーニングされ、木目こまかな活動を展開している。(1)活力と創造いきいきゾーン：このゾーンの主な施設は、平成元年度、地域材流通加工システム高度化事業により整備した木材市売市場「富士ひのきの館」である。この施設は、ホイストクレーンを備え富士ひのきの大径材をふんだんに使った、床面積265m<sup>2</sup>の木造モデルとしての役割をも併せもっている。製品の市売以外に富士ひのき銘柄材の展示や木工教室、各種イベントにも使われている。(2)夢と希望のわくわくゾーン：「水と希望と木造の家並」をテーマに富士ひのきで建てられた木造住宅の展示場からなっている。

展示棟の一つに平成3年度建設省の地域木造住宅供給促進事業で本木協が建設した静岡型モデル木造住宅第1号「富士ひのきの家」延床面積153m<sup>2</sup>がある。この住宅の設計は、県建築士会富士支部が担当し、木の優しさ、力強さをデザインした現状感覚にあふれる、21世紀に向けた人に優しい加齢型健康住宅である。このゾーンでは、住宅相談はもとより主婦の手による作品展などのイベントを開催し、誘客に努めている。(3) 安らぎと潤いほのぼのゾーン：木材会館を中心とするゾーンで、1階にはウッディショップがある。全国各地のウッドクラフトが陳列され、販売されている。3階はセミナー会場となっており、ウッディモニターの集いを始め、各種の作品展や木と住まいの情報を集めるための勉強会、研修会の場でもある。

## 6 「富士ひのき」の需要拡大に向けて

(1) 富士ひのき製品の展示PR：商標を貼付しての展示会、延べ5回、商標をデザインしたネクタイピンの配布、(2) 木造住宅展示場の整備：組合直営1棟、組合員4棟、誘客イベント5回、(3) 木工教室の開催：平成4年度8回、参加者数600名、(4) 情報の収集と発信：各地のイベントに参加年5回、消費者対象のハウジングセミナー年4回、ウッディモニターの集い年5回、広報紙・もくもくタウン・フジ年3回発行、新聞広告月4回、主婦の手造り作品展年4回、家づくり相談室の開設、及び組合員、川上への情報発信随時。

## 7 産地化形成に向けて

先に記した富士地区林業振興対策協議会は、〈1〉富士ひのきのPRと木材需要拡大策の推進 〈2〉富士ひのきの安定供給体制の整備 〈3〉地域生産材の加工、流通機能の高度化 〈4〉担い手の育成を柱に「富士ひのき」の産地化、銘柄化に取り組んできた。平成3年度には、隣接する地域と一体となった。「富士流域林業活性化センター」が設置され、前記の四つの柱に〈5〉日本のシンボル富士山を守る森林の整備と活用を加えて、富士ひのきの産地化、銘柄化を目指し原木から製品までの流通システムの確立に向け事業を推進している。

## 8 田子浦港木材協同組合の担う役割

21世紀の初頭には、全国各地の森林資源が充実期を抑え、産地間の競争は今後、ますます激化することが予想される。田子浦港木材協同組合には、富士流域林業活性化センターの一員として、木材の消費地、県の東部地域において、富士ひのきの消費の拡大を図るため市売市場の充実と木材の情報発信基地の機能の更なる強化が求められる。